

○年刊誌である本誌が三年目を迎えた。登山にたとえれば、『三合目』か。去年徳島へお招きした鎌田慧氏には遺句の鑑賞文を寄稿していただいた。お忙しい中（＊皓星社より鎌田慧セレクション全12巻刊行中）、やりくりして執筆くださつたもの。また、地元の岸積氏には、今回「中洲港」をテーマに書いてもらつた。七月四日夜の集会で徳島大空襲の体験談を聞かせてもらい、その時、氏が中洲に住んでいたと知つたからだ。もちろん、岸氏の本文にもあるように注意が要る。故・飯原一夫の画文集に紹介された武市正樹翁（明治34年生まれ）の談話を聞こう。「富田橋を渡つて右へ行たらすぐ中洲の波止場があつた。今の中洲町は新町川をもつと下つて中洲橋を東へ渡つた所になつとるんで、話がややこしいが間違わんように聞いてつかい。」

昨秋の三回忌、来徳者へのお接待のつもりで中洲散策企画しながら、雨で実現しなかつた。よい時季を選び、寂聴文学散歩の手始めに、ファンの方々と中洲めぐりをしてみたい。（征）

○兵庫県多可町の筆倉徹氏が「文豪大谷崎の机」の制作顛末を綴つた文章を寄せてくださつた。寂聴さんの喜ぶ姿が目に浮かぶ。すぐさましたためた寂聴さんのお礼の手紙を表紙に置いた。二〇〇六年一二月のこと。一八年が経過した。勲章をもらうとその疲れで命が縮むらしいと寂聴さんから聞いたが、すぐに〇八年の「源氏物語千年紀」となり、勲章疲れを言つていられなり大ブームが到来し、東奔西走しつつ、それをも寂聴さんは乗り切つた。今年またブームが起きた。ＮＨＫ大河ドラマ「光る君へ」を見ながら、寂聴さんと話したいと度々思う。「よく考えたわね。これもアリかも」と言いそう。石山寺にも訪れ、新座主の龍華さんと対談も、いや副座主龍妙さんも交えた阿波女鼎談も実現したかも、などと妄想する。今回はお空の上で愉しんでおられることだろう。今年は念願の第二句集『定命』も刊行され、「読む会」を開催し、会員が鑑賞文を寄してくれた。いちだんと句の世界が広がりうれしく思う。寂聴さんの若い頃からの知人・石川光さん、二〇〇〇年生まれの大学院生・小林亜咲さんの文章を掲載できたことも有難い。（紀）

「寂聴」第3号 2024

発行日 2024年11月9日

発行所 濑戸内寂聴記念会

徳島市中洲町3-40-802

Email : kikanshi@setouchijakuchou.com

Fax : 088-661-3292

発行人 東條 真理子

編集人 竹内 紀子

印 刷 徳島県教育印刷株式会社